12　杢兵衛鬼瓦を芸術品に高め、学問を愛し続けた瓦師

永坂杢兵衛（六代目茂三郎）
（1873～1966／棚尾）

1　瓦師、永坂杢兵衛家の六代目に生まれる

六代目永坂杢兵衛こと茂三郎は、明治6年（1873）に父正勝、母八重の間に生まれた。茂三郎は、明治10年（1877）11月、妙福寺（毘沙門さん）境内にあった棚尾学校（同学校には、8つ後輩に藤井達吉、7つ後輩に平岩種治郎がいた）に入学し、明治16年（1883）年に卒業した。棚尾学校在学中、妙福寺住職の佐野良契に見出され師事した。

瓦屋として七代続いた（昭和19年に休業、その後「瓦屋杢兵衛」の暖簾は生きていて瓦販売業を再開し、昭和33年頃まで続いた。七代目利貞は、昭和31年から碧南市議になり、四期務めた）永坂家の中で、家業を隆盛させたことはむろんだが、向学心に燃え、文人として教養人でもあった六代目杢兵衛を中心に取り上げることにした。

2　碧南の瓦産業と永坂杢兵衛家の瓦作り

現在の碧南市の製瓦業は、地場産業三州瓦の中心として重要な地位を占めている。この三州瓦の基礎を築いたのが、棚尾の永坂杢兵衛家である。永坂家は、代々杢兵衛を襲名している。二代目杢兵衛は江戸時代の中頃、京都に赴き7年間造瓦法を学び、帰国して天明8年（1788）に瓦屋を本格的に開業した。それ後6代にわたって棚尾の地で、瓦を作り続けてきた。そのため、この地には杢兵衛作の瓦が多く残されている。屋根を彩る鬼瓦は威厳もあり、長い歴史と伝統に支えられた装飾性豊かで実用的な文化財である。

3　12歳で京都に遊学、多方面の学問を学ぶ

茂三郎は、棚尾学校卒業後の明治17年（1884）、12歳のとき、京都浄土宗西山深草派総本山誓願寺の山本観純に伴われて京都へ遊学し、誓願寺に起居した。

翌18年、祖父嘉平治（四代目杢兵衛）重病の報に、急きょ帰郷した。祖父の病は重く、茂三郎の母八重は必死の看病をするが、その疲れから母は倒れ、8月帰らぬ人となった。そして、12月には祖父も亡くなった。

茂三郎は、14歳にして祖父と母を一時に失い大変力を落とした。しかし、気を取り直した茂三郎は、再び京都へ赴いた。

茂三郎は京都において、ときの名士を訪ねていろいろ学んでいる。その名を挙げれば、西尾為忠（儒学）、宇田淵（儒学）、谷鉄臣（漢学・蘭学）、中村確堂（漢学）、市村水香（漢学）、斉藤聞精（仏書）など、多方面の学問を学んだことが分かる。

明治20年(1887)3月には、京都尚寧学校に入学し、英学を学んだ。翌21年(1888)9月、同志社普通学校2年に編入学した。

4　帰郷するも、抑えがたし向学心

明治25年（1892）1月には、同志社の寮に移り、同年6月、19歳で同校を卒業した。なお、茂三郎は普通学校卒業の少し前、父に大学選科入学の許しを請うたが、許されなかった。

普通学校を卒業した茂三郎は、同志社の寮を出て、下宿を始めた。京都簿記専門

学校に入学するためであった。しかし、7 月 24 日帰郷の途についているので、その志は果たされなかったようである。

茂三郎は明治 25 年（1892）7 月 25 日棚尾村の自宅に帰った。翌日妙福寺を訪問し、住職の良契へ帰郷の報告をした。茂三郎は、同年 8 月 2 日の日記に、

「此レ余ガ実業ニ従事スル第一ノ日ニテアリキ。午前ハゼボン氏ノ論理学ヲ読ミ、午後鬼板ヲ造ル稽古ヲ始ム。此レヨリハ、午前読書シ、午後家業ニ掛ルコトト定メタリ」と記している。瓦職人としての定められた道を歩むべく郷里に帰ってきた 19 歳の茂三郎ではあったが、学問に対する情熱は一向に衰えていなかった。

5　学問への希求と家業継承の相克

11 月になると、法学の通信教育を始め、明治法律学校講法会会員となった。茂三郎帰郷後、永坂家を多くの青年たちが訪れるようになった。日記に見られる名前を挙げると、杉浦玉吉、石川吉次、斉藤和太郎、石川安松、磯貝弥一郎、永井治郎、平岩種治郎、石川八郎治などがいた。

京都に学んだ憧れの同輩・先輩として棚尾の向学に燃える蒼々たる若者らが集まった。瓦屋という同業の者だけではなく、いろんな分野の青年たちが、空腹に飢えた獅子のごとく茂三郎の下に集まったのである。まるで幕末、改革に燃えた志士たちが新しいことを学ぼうと吉田松陰の下に集まった松下村塾のようでもあった。

きっと茂三郎は、学問を究めたいという純粋な願望と、瓦師永坂家の長男として家業を継がねばならないという責任感との相克に悩む日々を送ったことであろう。

6　10歳歳上の清沢満之との交流

明治 26 年（1893）1 月 4 日、20 歳になった茂三郎は、10 歳歳上の清沢満之に会うため、大浜の西方寺を訪れた。日記には、

「午後、徳永（清沢満之）氏帰国ニ付キ、氏ヲ西方寺ニ訪ヒ、客年加茂兄ヲ氏ニ紹介セシニ付テ氏ニ謝ス。談話四時ニ至ル。氏ハ小躯、然レドモ常ニ微笑ヲ含ンデ対話ナシ、談実業ノ事ニ及ブ。氏曰ク、実業家ハ尤モ広告ヲ必要トスト。談又タ氏ノ僻ナル厭世主義ニ及ブ」とある。

この頃は、満之の『宗教哲学骸骨』の英訳がシカゴ万国宗教大会に於いて好評を博していたときであった。難解な満之の哲学に対して、仏教に関心が深かった茂三郎ではあったが、満之の思想を「厭世主義」と捉えていた点が面白く、興味深い。

7　文人としての刊行物を次々に出版した晩年

茂三郎は家業にも精を出し、長男としての責任をよく果たした。明治 27 年（1894）、藤澤山清浄光寺（遊行寺・ゆぎょうじ）の瓦受注に際しても交渉に当たった。茂三郎は新しい瓦製造の技術を導入して、質を向上させ、生産額を伸ばした。また、その後棚尾村の村政にも関与した。29 歳で収入役に選任され、明治 40 年（1907）には棚尾村村会議員になり、以後七期にわたり昭和 9 年（1934）まで務めている。大正 13 年（1924）に全国瓦業組合連合会が創立され、茂三郎は監事に就任した。

昭和 20 年（1945）72 歳のとき、宇宙の基本原理を漢詩にまとめた。『江村自叙伝』を出版した。それ以後『江村詩集』『江村百題』『江村五絶』『江村七絶』『古今名吟抄と随筆』などを次々と刊行した。

茂三郎は昭和 33 年（1958）、瓦業としての杢兵衛家の廃業を見届けた後、昭和 41 年（1966）、93 歳でこの世を去った。

◆もっと知りたいなら

・『文化財展 永坂杢兵衛の瓦』資料
（平 18 杉浦明）